氏　　名(本籍)	Stefan Peter Grace（ニュージーランド）	
学 位 の 種 類	博士（仏教学）	
学 位 記 番 号	博仏甲第30号	
学位授与の日付	平成27年３月25日	
学位授与の要件	学位規程第５条第１項該当	
学 位 論 文 題 目	**鈴木大拙の研究** **―現代「日本」仏教の自己認識とその「西洋」に対する表現―**	
論 文 審 査 員	主査　駒澤大学教授　博士（文学）	小川　隆
	副査　駒澤大学名誉教授　文学博士	石井　修道
	副査　駒澤大学教授	石井　清純

論 文 内 容 の 要 旨

本論考は、D.T.Suzuki の名で世界的に知られる思想家、鈴木大拙（1870－1966）の人物と思想を、総体として捉えようとしたものである。全体は、時系列にそって大拙の生涯を跡づけつつ、その時期ごとの思考と表現を分析する内容となっており、大略、次のような構成をとっている。

序論

1. 生誕から渡米まで　1870・M3　（０歳）～ 1897・M30（27歳）
2. 在米時代　1897・M30（27歳）～ 1909・M42（39歳）
3. 学習院時代　1909・M42（39歳）～ 1921・T10 （51歳）
4. 大谷大学時代――敗戦まで　1921・T10 （51歳）～ 1945・S20 （75歳）
   - 4 － 1　1920年代――大谷大学着任
   - 4 － 2　1930年代――迫り来る軍国主義
   - 4 － 3　1940年代――敗戦まで
5. 戦後　1945・S20 （75歳）～ 1966・S41 （96歳）

付録：大拙の基本思想――晩年の随筆三篇に対する英訳と注解

本来、中国で形成された「禅」という宗教が、今日、「Chan」という中国語でなく「Zen」という日本語の発音で世界にひろまっているという事実が端的に示すように、「禅」は近代においては、中国でなく、日本から、「西洋」に向けて英語で発信された。そこで最も大きな役割を果たし最も大きな影響力を発揮したのが鈴木大拙であったと看ることに、おそらく、異論はないであろう。

しかし、それほど大きな影響力をもったがゆえに、大拙に対しては、極度の崇拝や賛美とともに、極度の批判や非難も向けられている。とくに1990年代、アメリカの複数の研究者からあいついで提出された大拙批判の諸論は、今日の大拙評価において決定的な意味をもっている。すべてに超越する根

源的な価値を「禅」に付与し、そしてその「禅」の特性を排他的・独善的に「日本」の特殊性と等置することによって、日本のナショナリズムを美化し強化し、そして戦争の推進に協力したもの、そのような評価と印象は、今日、欧米の研究者や学生のあいだに広まっている。

そうした批判には本質を突く鋭さがあり、今日、禅について考えようとする場合、その批判の論点を無視することはできない。しかし、一方、その批判には「偶像破壊」を急ぐ、ある種の性急さと偏りがあることも否定できない。大拙の主張のなかにナショナリズムの要素があるのが事実だとして、では、大拙は、どのような時代の必然性のなかでそのような思考と表現を生み出すこととなったのか、それを大拙の生きた時代の必然性のなかで理解するという作業を経なければ、大拙に対する正当な理解や評価は望み得ないであろうし、批判するにしても、その批判は本質を捉えたものになりえないであろう。かかる観点から、本論考は、手放しの崇拝や賛美にもくみせず、また、今日的価値観からの一方的な評価や断罪に陥ることをも警戒しつつ、鈴木大拙という人物の全体像を、大拙が生きた時代の現実に即して把握することを目標とする。

しかし、それは言うほど簡単なことではない。大拙は明治という時代の始まりとほぼ時を同じくして誕生し、そこから 1 世紀近くに及ぶ長い生涯を歩み、その死の直前まで現役の思想家・著述家でありつづけた。その一生は、明治維新から第二次世界大戦をへて戦後の高度成長の時代にいたる近代日本の激動の歴史と、そのままふかく重なりあっている。しかも、その思考と活動は、日本とアメリカという、距離的にも文化的にも遠く離れた二つの地にまたがり、しかも、漢文と日本語と英語という相いへだたった三種の言語の間を往復しながら展開された。それをただ一個の人物の思想として一律に論ずることには、無理がある。そこで本論考は、あらかじめ主題を分類して「大拙の〇〇論」とか「大拙の××観」といった分析を行う方法をとらず、大拙の誕生から終焉まで、時系列に沿って、その時期ごとの言説と行動を時代相のなかで記述してゆくという方法をとっている。時代相というなかには、日本の近代史上の大事件も身辺の瑣事といわれるような事柄も、同等に含まれている。大拙その人にとっては、どちらも重要な所与の現実だったからである。その記述には、新版の『鈴木大拙全集』で大幅に公開された書簡と、近年、少しずつ公開されてきた大拙の英文日記を最大限に活用する（それらをふまえた評伝は、管見のかぎり未だ存在しないと思われる）。また、大拙の著述については、極力、同時期になされた日文の所説と英文の所説を対比しながら分析することを試みる。英文で「西洋」向けに書かれたものと和文で国内向けに書かれたものの間には実は大きな相違があるが、従来の賛美や批判には、往々その一面のみを材料としたり、逆にその両面をひとまとめに扱ってきた偏りがあると感ぜられるからである。

しかし、そのように時期別・言語別の分析を重ねてゆくと、却って、くりかえし現われる主題や一貫して変わらない大拙の姿勢や思惟というものが浮かび上がってくる。本論考では大拙の変わらぬ特性として次の 3 点を抽出した。

1）楕円的思考、ないし太極図的思考

大拙の思考は一個の中心をもつ円の形ではなく、二つの中心をもつ楕円のような形をしている。体（真空）と用（妙用）、空と色、肯定（即）と否定（非）、伝統と近代、東洋（日本）と西洋、愛国と国際

化等々、いずれの場合も、文字のうえに書かれているのは相対する二つの極だが、大拙が伝えようとしているのは、その両極を対等にふまえつつ両者をともに包摂して円成する楕円の円周であり、その点を押さえなければ、大拙の論述は意味不明なものにしか見えないであろう。

2)「日本」に対する二つの態度

そのことは大拙の「日本」論にもあてはまる。大拙がナショナリズムの立場から「日本」を美化し理想化しているという批判は事実に基づいていないわけではないが、しかし、そのような「日本」論は、不平等条約に苦しむアジアの新興国――「後進国」――明治日本にとって、またのちには第二次大戦後の敗戦国日本にとって、欧米列強諸国に独自の価値と対等の地位を承認させるという切実で切迫した課題克服のための努力であったことも見落とせない。しかも、そうした「日本」論は大拙の著述の半面にすぎず、彼はそれと平行して国内向けには「西洋」近代を基準として日本の後進性・自閉性を批判する文章を書き続けている。本論考ではそれを「損な二枚舌」と称し、その両面を総体として解明することに努めた。

3）明治新仏教の古典としての大拙の著述

大拙の思想を臨済禅や浄土真宗の伝統と無関係に語ることはできないし、西洋近代思想の影響を無視することも、むろん、できない。しかし、大拙の思想的背景をかりに敢えて一言でいうとすれば、それは「明治新仏教」だというべきであると本論考は考える。廃仏毀釈の淘汰や近代化の荒波と戦いながら仏教の新生をめざした「明治新仏教」の流れのなかで釈宗演は活躍し、大拙もその流れをひき継いだ。脱宗門的な活動形態、近代の哲学や科学と調和可能な仏教思想の構築、仏教の源流としてのインド・セイロンへの憧憬、国際化志向、現実社会への積極的関与、宗教儀礼でなく講座と出版物によって普及をはかる手法――そうした「明治新仏教」の諸特徴は、そのまま大拙その人の特徴でもあった。大乗仏教や禅や浄土の教義や歴史に関する大拙の解説が学問的に正確でないという批判は早くから繰り返されてきたところだが、本論考は、大拙の所説が過去の歴史の忠実な祖述や再構成をめざしたものではなく、近代社会にむけて「明治新仏教」の教義と伝統を新たに創出したものだったという観点を提示する。大拙が語る仏教史は、実証的な歴史研究の基準で評価されるべきものではなく、いわば「明治新仏教」の「教相判釈」として理解されるべきものであると本論考は考える。

最後に、大拙の基本思想を集約的に示した晩年の随筆 3 点に対して英文による翻訳と詳注を作成し、付録とした（もとは修士論文の際に日本語で提出したもの）。そこには、大拙と同じく、英語と日本語の双方をふまえた思索と表現を自らに課するという願いがこめられている。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は、かつてのような賛美や崇拝と、近二十年来の糾弾や断罪、その双方をともに相対化しつつ、鈴木大拙という人物の実像を、今日の観点から歴史的に考察しようとしたものにほかならない。

かつて唐代の中国で形成された「禅」という宗教は、宋元以後、日本を含む東アジアの各地にひろまり、そして、20世紀には、日本から「ZEN」という名でさらに欧米世界に発信された。その過程で

最も大きな影響力を発揮したのが、D.T.Suzuki こと鈴木大拙（1870－1966）であったことは疑いない。

だが、その影響の大きさと名声の高さゆえに、大拙に対しては、生前、極度の崇拝や賛美が向けられ、そして、その反動として、1990年代には、主にアメリカの研究者の間からあいついで大拙批判の諸論が提出された。そこにはいくつかの異なった論点が見られるものの、大拙の言説を日本のナショナリズムと一体視して批判するという姿勢は共通していた。すべてに超越する根源的な価値を「禅」に付与し、そしてその「禅」の特性を排他的・独善的に「日本」の特殊性と等置することによって、日本のナショナリズムを美化し強化し、結果、戦争の推進に与って力あったもの――大拙に対するそのような評価と印象は、今日、欧米の研究者や学生のあいだで、ひろく共有されているらしい。

本研究は、そのような観点をふまえて大拙の歴史的な位置を客観化しつつ、しかし、またそうした批判に見られる性急な「偶像破壊」の偏向をも冷静に認識しながら、大拙という人物の言行を、20世紀の歴史の上で極力如実に捉えようとする。大拙の主張のなかにナショナリズムの要素があることを事実として認めた上で、それが如何なる時代相のなかで生み出されたものであるかをたんねんに跡づけ、今日の価値観からの評価をひとまず棚上げして、大拙の言説の意義と限界を、まずその時代の文脈のなかで理解しようとするのである。

とはいえ、それは言うほど簡単なことではない。大拙は明治という時代の始まりとほぼ時を同じくして誕生し、そこから 1 世紀近くに及ぶ長い生涯を歩み、その死の直前まで現役の思想家・著述家でありつづけた。その一生は、明治維新から第二次世界大戦をへて戦後の高度成長の時代にまでいたる近代日本の激動の歴史と、そのままふかく重なりあっている。しかも、その思考と活動は、日本とアメリカという遠く離れた二つの地にまたがり、しかも、漢文と日本語と英語という三種の異なった言語の間を往復しながら展開された。それをただ一個の人物の思想として一元的に論ずることには、かなりの無理がある。そう考えた本論考は、あらかじめ分野や著作を限定して「大拙の〇〇論」とか「大拙の××観」といった問題設定を行うことを控え、大拙の誕生から終焉まで、次のような順序で、それぞれの時期ごとの言説と行動を時代相のなかで記述してゆくという方法をとっている。

序論

1. 生誕から渡米まで　　1870・M3　（0 歳）～ 1897・M30（27歳）
2. 在米時代　　1897・M30（27歳）～ 1909・M42（39歳）
3. 学習院時代　　1909・M42（39歳）～ 1921・T10　（51歳）
4. 大谷大学時代――敗戦まで　1921・T10　（51歳）～ 1945・S20　（75歳）
   - 4 － 1　1920年代――大谷大学着任
   - 4 － 2　1930年代――迫り来る軍国主義
   - 4 － 3　1940年代――敗戦まで
5. 戦後　　1945・S20　（75歳）～ 1966・S41　（96歳）

付録：英訳と注解『東洋的見方』（1963）の 3 章

かかる時系列に沿った分析の結果、大拙がそれぞれの時期、どのような時代背景や身辺事情のなかでいかなる思索と著述を行ったか、またどのような主題に対する取り組みが同時期に平行して進行していたか、また同じ主題に対する取り組みが前後の時期との間でどのような連続や変化を示したか、そうしたことが明らかになった。今、一例だけ挙げれば、太平洋戦争の時期は、大拙にとって、敦煌文献・盤珪・妙好人などの研究が集大成され、それを通じて「般若即非」「無分別の分別」など、独自の「禅思想」が深められた時代であった。しかし、大拙は同じ時期、実は吉田茂や海軍の一部の人々との関係を通じて、戦争終結のための秘密裏の会合に西田幾多郎とともに参与したりもしていたのである。ほかにも各時期に関する新たな知見は枚挙にいとまないが、本研究によって、大拙の各時期におけるこうした多面性・複合性が――おそらく初めて――立体的に把握された意義は、きわめて大きい。

しかも、その記述には、新版の『鈴木大拙全集』で大幅に公開された書簡と、近年、少しずつ公開されてきた大拙の英文日記が最大限に活用されており、大拙の言説についても、極力、同時期になされた日文の所説と英文の所説の対比が試みられている。そうした分析によって、外に向かっては理想化された「禅」を根拠に西洋近代の限界を批判し、内に向かっては西洋近代を根拠に日本の後進性と自閉性を戒める、という大拙の著述の二面的様相が明らかになった。従来の賛美や批判には、かかる複合的な多面性のなかから一面のみを切り取った立論が、少なくなかったように思われる。

このように、本研究は、一元的な概括を急がず、各時期の言行をその時期ごとの社会状況や身辺の状況と対照しつつたんねんに跡づける。大拙の言説に矛盾がある場合も、それを矛盾として断罪したり、逆に無理につじつまを合わせて擁護したりすることもなく、矛盾は矛盾として記述し、そのような矛盾の生じた所以を時代相との関係で考えようとする。「禅＝日本」という物語の虚構性についても、それをナショナリズムとかオリエンタリズムといった罪名で一方的に切って捨てるのでなく、欧米列強諸国に対して正当な地位の承認を求める、いわば後進国からの正当な生存の要求という一面もあったことを――むろん負の面に対する批判的検証とともに――慎重に記述する。こうした複眼的分析は、本研究のすぐれた特長となっており、日文と英文、双方の先行研究の豊富な引証が、それを援けている。

しかし、本研究の分析は、そのような時期別・言語別の分析のみで終わらない。そうした時期や言語を区別した分析を重ねることで、逆に、時を越え言語を越えてくりかえし現われる一貫した主題や姿勢を浮かび上がらせていることが、本研究のいまひとつの長所となっている。本研究の「序論」は、そのようにして得られた大拙の一貫した特徴を次の 3 点にまとめている。

1）楕円的思考、ないし太極図的思考：本研究は、大拙の思考を、一個の中心をもつ円の形ではなく、二つの中心をもつ楕円のような形だという。体（真空）と用（妙用）、空と色、肯定（即）と否定（非）、伝統と近代、東洋（日本）と西洋、愛国と国際化等々、いずれの場合も、文字のうえに書かれているのは相対する二つの極だが、大拙が伝えようとしているのは、その両極を対等にふまえつつ両者をともに包摂して円成する楕円の円周であると本研究は論じている。

2）「日本」に対する二つの態度：本研究は、この観点を大拙の「日本」論にも適用する。上述のように、本研究は大拙がナショナリズムの立場から「日本」を美化し理想化していることを事実として

認めた上で、そこに、不平等条約に苦しむアジアの「後進国」明治日本にとって、またのちには第二次大戦後の「敗戦国」昭和日本にとって、欧米列強諸国に独自の価値と対等の地位の承認を求めるための切実で切迫した努力、という一面があったことを指摘する。しかも、その努力は、「西洋」近代を基準として日本の後進性・自閉性を批判するという国内向けの努力と表裏一体のものであった。本研究はそれを「損な二枚舌」と称し、その両面を総体として解明している。

3）明治新仏教の古典としての大拙の著述：本研究は、大拙の思想における臨済禅や浄土真宗、あるいは西洋近代思想の影響を重視しながらも、大拙の立場を敢えて「明治新仏教」の思想家と規定する。脱宗門的な活動形態、近代の哲学や科学と調和可能な仏教思想の構築、仏教の源流としてのインド・セイロンへの憧憬、国際化志向、現実社会への積極的関与、宗教儀礼でなく講座と出版物によって普及をはかる手法――そうした「明治新仏教」の諸特徴がそのまま大拙にもあてはまると、本研究はいう。大乗仏教や禅や浄土の教義・歴史に関する大拙の解説が学問的に不正確であるという長年くりかえされてきた批判に対しても、本研究は、大拙の所説は過去の歴史の忠実な祖述や再構成をめざしたものではなく、近代社会にむけて「明治新仏教」の教義と伝統を新たに創出した、いわば「教相判釈」だったのだと論じている。

「序論」に提示された上記 3 点は、今後、大拙の著述の個別の解釈を行ってゆく上で、きわめて有効な観点となるにちがいない。

最後に、本研究は、大拙の基本思想を集約的に示した晩年の随筆 3 篇に対して英文による翻訳と詳細な注釈を作成し、付録とする。これはかつて修士論文の際に日本語で提出されたもので、将来、考察の成果を英語圏にも発表する布石として、補訂を加えつつ英文で作成しなおしたものである。そこには、大拙と同じく、英語と日本語の双方をふまえた思索と表現を自らに課するという願いがこめられているという。

むろん、大拙の著作は膨大であり、また大拙と関わりのあった人物や歴史事実は無数である。そのすべてを一研究で網羅することは到底不可能であり、本研究の考察が及んでいない材料や事実は、まだまだ多い。だが、上記のように、本研究は、性急な価値判断を抑制し、その時代の文脈のなかで大拙の言行を理解しようとしたものであり、英文と日文の原資料と先行研究の充分な引証によって――いわば、日本語の眼と英語の眼の両方で見ることで――これまでに無かった公平かつ複眼的な大拙理解に貴重な一歩を踏み出した研究と評してよい。よって、本研究は「博士（仏教学）」の学位を授与するに充分な質と量を具えたものと、審査委員一同は判断する。